

鳴沢溶岩樹型

これらの樹型は、864 年の貞観大噴火で昔の森が溶岩流に飲み込まれたことにより火成岩に開いた空洞です。鳴沢は、互いに近接しあう樹型の数が合計 12 箇所という世界的な標準から見ても非常に多いという点が特徴的です。その一部は直径が 5m もあり、噴火が風景を変えてしまう前には古くて巨大な木だったことがわかります。

溶岩流が必ず樹型を形作るというのではなく、溶岩のケイ酸含有量が 50～51%と比較的高く、表面勾配が、溶岩の動きが遅すぎず、また速くなりすぎない約 3%であり、また、溶岩流の深さが必ず空洞が残る浅さであるという溶岩樹型の形成にぴったりの条件を満たしている必要があります。鳴沢では、元の地表がわずか 4m 下に見える、まるで井戸のような空洞の中を見下ろすことができます。青木ヶ原樹海の他の地域では溶岩流の深さが 100m 以上になっている場所もあります。

森の中のスパイラル (溶岩流の噴気孔)

1993 年の地質学調査ではこの地域に溶岩スパイラルも発見されました。溶岩スパイラルは、溶岩流の中に閉じ込められた水分が、水蒸気になって急速に膨張して表面で爆発し、冷えた溶岩に特徴的な跡を残したものです。鳴沢には、世界的な基準でも非常に多いスパイラル群があり、その多くは溶岩層が冷えて裂けることで生じた低い「崖」の斜面に簡単に見ることができます。